せたかむい

古平町役場総務課
☎42-2181（代表）
平成20年2月1日

年表で読む古平の歴史

〔126〕

商工業 ⑫

◇無限責任大典記念古平信用組合創立 続く

この登記により、組合の事務所を組合長梅野吉太郎宅の一室に置き、常務理事米田岩が吉事務関係を担当し、理事、監事の合議制により事業を開始した。

◇事業報告

大正八年一二月一四日、古平信用組合の大正八年総会（大正四年創立）が古平尋常高等小学校で開かれ、組合員数二一八人中、一九二人が出席した。

総会での「大正八年度末事業報告」があり、それにより当時の概況を知ることができる。

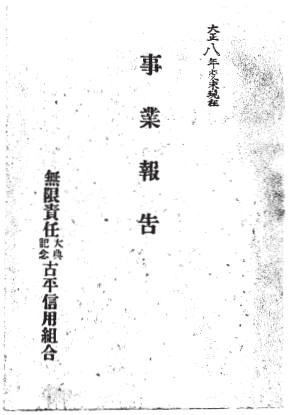
事業報告書から、組合員の出資口数を職業別に見ると、

職業別	組合員数	口数
農業	七六	一三二
工業	三五	六一
商業	一〇八	四三〇
水産業	一一三	二五九
林業	〇	〇
雑業	四	一〇
計	三三六	八九二

事業の状況として

一、出資金　前年に比べ一五二口、三千四十円増加し、且つ全部の払い込みを完了し、払込未済は皆無の好成績を告げたり

一、貸付金　本年度貸付金高三万八千八百七十九円、償還金高二万二千九百九十九円、年度末現在四万八千七百十二円五十銭にして、前年度に比べ一万五千八百八十円の増加である。資金の需要最も多きは三月にして、鰊漁業の準備に供し、次は七月に多かりしは、前年の浜町火災のため、建築資金に充用せるためなり。回収状況は毎月格段の変動なく、ただ、本年六月において最も多額の償還金を期待せしに、海産物価格下落のため、償還期間の延期を願う者多数あり、止むを得ざるものと思考す。利息の収入高六千三百八十六円十一銭にして、前年に比べ五千百六円一銭五厘の増収とす。

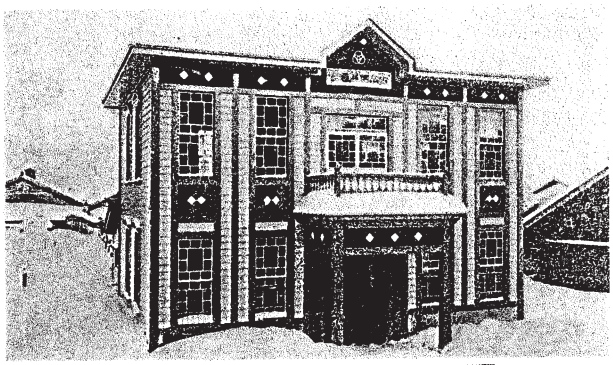

大正八年度事業報告
事業報告
無限責任大典記念古平信用組合

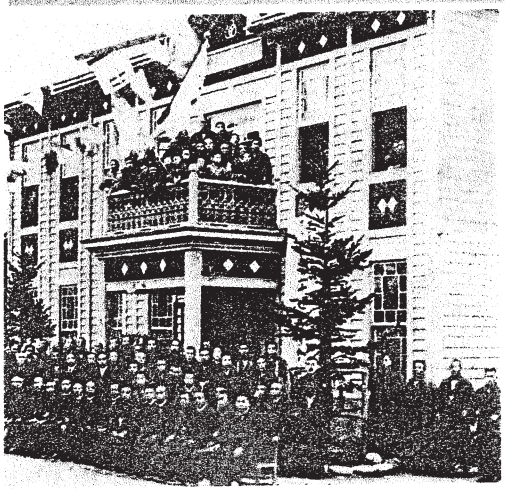
← 創立当時の発起人と役員
理事・寿原要太郎
理事・米田岩吉　理事・梅野吉太郎
監事・石河耕作　監事・石井豊太郎
発起人・原田吉太郎

◇事務所新築

大正一〇年（一九二一）一一月、大字浜町九三番地に、工事費六千五百万円で事務所を新築した。専任事務員として竹内厚を常置し、一般事務を執るようになった。

大正一一年、それまでの総会制を二四人の地区別総代制に改定した。





偉容を誇る新事務所の落成
新しい建築様式による豪壮な建物に町民も驚き、落成式に集まった人たちも歓声を上げて盛大に祝った。

大正一二年四月、創立以来の営業実績が認められ、産業組合中央会から次のように表彰された。

表彰状

北海道無限責任大典記念
古平信用組合

其成績良好ナルヲ認メ本会表彰規定ニ依リ茲ニ之ヲ表彰ス

大正十二年四月廿五日
産業組合中央会
会頭　志村源太郎　印

大正一三年一月、理事に本間愛蔵、監事に小林栄吉を増員し、事務員に竹浪正憲を採用した。この年、理事梅野吉太郎は、富蔵と改名した。

組合の事業は、暦年度に定めてあったが、ニシン漁業にかかわる金融に関係することが大きく、暦年度では不便であることから、七月一日から始まり、翌年六月三〇日に終わる一事業年度とした。

◇創立拾周年記念

大正一四年、創立拾周年記念式典を行い、記念誌を発行した。

創立以来、主産業であった漁業、特に鰊の好漁と海産物の好調にもより、組合の事業も発展をした。

後に、組合四十周年記念誌（昭和三〇年）の中で、梅野理事長は創立の動機や周囲の状況について、当時のことを次のように回顧している。

「当時、わが古平町はなお古い漁村経済とでも申しましょうか、近代的な金融などは見られず、金利月二分から三分の貸金業金融が行われていました。そこで同士数名で相談し、共益会という貯金会を作ったのが大正の初めです。これが意外に賛同者を得て会員も増え、その資金で月一分二厘五毛の利息で融資が行うことができるようになりました。

たまたま、当時すでに本道でも産業組合が百二十以上もあり、その中で信用利用組合の設立も次第に進み、今の旭川信用金庫の始まりもこの頃で、大正三年二月に無限責任信用組合設立の申請がなされました。そこで、共益会を母体として産業組合法による信用組合として、大正四年十月二十二日、その年の大正天皇御即位大典を記念して、わが組合が創立されたわけです。

古平町としては、信用組合などというものは初めてでしたから、その運営や将来については心配もありました。当時、組合事務所も私の宅でしたし、最初の理事である寿原、米田両氏と私、それに監事石河、石井の両氏以外に職員はなく、定まった勤務時間もなく、昼夜の別なく、新しい仕事をなんとかやりとげようと頑張ったものです。幸い町民各位の非常な賛同を得て業績も伸び、大正十一年に当時としては最新の現在の事務所を建て、職員もおき、初めて信用組合らしい基礎と体制ができた次第です。」　～続く～

事業成績表

	組合員	出資口数	払込済出資金	貸付金
大正四年度	一六〇	三二七	一,〇一一	一,四八五
同　八年度	三三六	八九二	一七,八四〇	四八,七一三
同一三年度	六三八	二,二八七	四五,七四〇	二四〇,三八〇

高野名寺作さんの日記から
当時の世相を見る〈133〉

昭和三年 ～続く

▼六月八日

五時起床、昨夜は二階の悦三の部屋で休んだが、たまにダハンするくらいのもので一向に手がかからぬ。期待したイワシ漁一向に思わしくない、如何したものやら。朝、熊さんが自転車で、石井さんへスイレンの根を貰いに行ったら、ボタンの花も貰って帰る。スイレンは今度こそどうにかしてうまく育てたいものだ。午後四時の自動車で本主人と日高の姉さんが小樽から来られる。本主人は大病後すっかり恢復し丈夫になられた。皆安心だ。

▼六月九日

イワシ漁この頃は一向に思わしくなく、アテが外れて困る。鰊漁の不漁にまたイワシの不漁、困ったものだ。余市、古平間の自動車の客は毎日五〇人～六〇人もありなかなか繁昌、代わりに、浅野の回漕店は大打撃、保木は二、三年前までは一軒で独り舞台だったが、何事も世の中のことはわからぬものだ。

▼六月一〇日

起床五時半、朝は寒かったがだんだん暖かくなってきた。熊さんは農園へ行きス虫取りだ。手伝いのハル子はワラビ採りに行き、妻は家事に忙しい。悦三は日増しによろしい。看護婦さんがいるので楽だ。天気快晴で暑からず寒からず、一番心地よい時だ。午後一時から衛生組合戸外検査日なので廻り、三時に終わる。のち裏のダリヤに馬ふんなどのこやしをやる。よい運動になった。

▼六月一一日

起床六時、正治を連れて浜へ出て見る。イワシ漁、古平沖はどうしてかダメなので、発動機船に小樽沖まで引かれて行き、そこで五玉ぐらいとってくるとのこと。三年前は古平沖は好漁場といわれていたのにいろいろ変化するものだ。熊さんは相変わらずス虫捕りに行く。私も三時頃から農園行き。大輪菊の根分けする。蕾のついたのを家に持ち帰る。いい運動になった。向かいのやぶ長の二歳の女児、ハシカの後肺炎を起こして死亡、家にいた看護婦さんが吸入の手伝いに行ったがダメであった。小さいのに可哀想なことであった。夜、やぶ長へお悔やみに行く。ソバをよばれて一〇時帰る。悦三もだんだん良くなってものを食べたいという。本主人、病気全快として、今日紅白の餅を配られる。本当に大切な人だけに全快して何より良かった。

▼六月一二日

昨日から、今日は早起きして農園の花畑を整理しようと思っていたので、四時半に起きた。早明るくなっている。そのうちに熊さんが来て五時に行く。桐畑を見回る。菊の大株になっているのを掘り起こしてそれぞれ植え付けする。七時頃熊さんが来たので二人でやる。秋には御大典もあるので、手入れをしてよい花を咲かせたいものだ。八時帰る。ス虫がひどく熊さんは虫捕りに忙しい。それに腐乱病でリンゴの樹が枯れる。食後、店のひまをみて裏の花畑へ行く。昨日分けた大輪菊を植えた、全部で二七本。これだけ手入れするのもなかなか忙しいだろう。夜、やぶ長の通夜に行き一〇時帰る。

▼六月一三日

起床五時半、天気快晴、悦三は日増しに良くなり、昨日はゆで卵などを食べるようになった。体温も三七度ぐらい。一〇時、やぶ長の葬式送りに行く。禅源寺の中庭、裏庭などを見る。ツツジ、

ボタンが花盛り、ボタンはいいものだ。ボタンの大輪を貰うことにした。帰りに長野さんの庭に行き、いろいろ植木を見る。昼食後、一時から営業税のことにつき経営報告、その他協議がある。三時過ぎに帰る。所得税は四月三〇日までに忘れずに申告せねばならぬ。五時に自転車でヨまで菊苗を貰いに行く。この頃の日の長いこと、従って夜はいくら寝ても眠いことだ。八時頃から雨、樽新の慰安活動写真あるとて、一一時頃自動車で帰る人もたくさんいる。今日から天野さん、ス虫捕りの出面に来る。

▼六月一四日

昨日は随分蒸し暑かったが、八時頃から雨が降り、菊苗を植えてからの雨はよい雨だ。熊さんは天野さんと、田岸の浜からイワシを煮た汁を貰い農園へ運ぶ、大根、カブのよい肥料になるとのこと。イワシ漁も思わしくない。雨も午後から晴れる、トマト、キウリ、その他の苗を植えるとのこと。雨の後で良いだろう。悦三も今は吸入と湿布だけなので看護婦さんも楽になった。父は四月頃は元気が良く、佐渡へ行くと言っていたが、この頃は暑さに向かい疲れようだと言い、元気がなくなったようだ。例年、今頃からだんだん調子が悪くなるようだ。

▼六月一五日

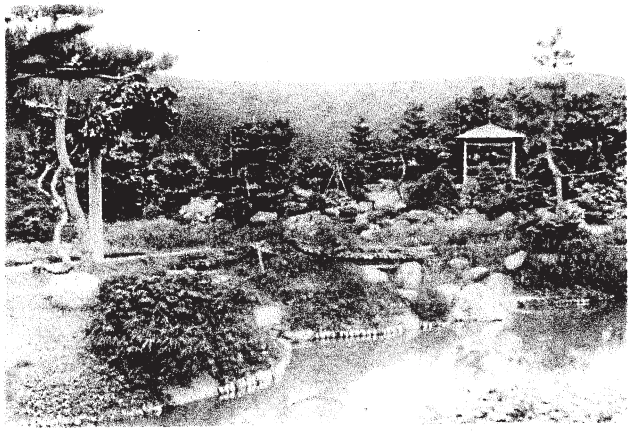
今日は祝聖会の例会日、今朝は三時半に目が覚めた。支度して出かけたら三番目であった。読経が終った頃、朝日はまだ昇らない。寺もひやひやして寒い。例の通り和尚の部屋で話す。境内は広々としていて、いろいろな樹や草花などがあるので気も晴れ晴れする。七時帰る。今日は札幌神社祭で、町では旗を立て、学校、会社などは休みだ。種田干場で学生野球大会があるとて、吉治らが見物に行く。本年は不況で運動会もないのでさびしいことだ。午後二時頃農園へ行く。熊さん、天野さんはス虫捕り、女面は畑の草取りだ。花畑の草取りなとして五時帰る。

▼六月一六日

起床六時、洗面後、正治をおんぶして浜へ出て見る。イワシ船が入港するがパラパラ掛かりだ。朝から入梅らしく時々小雨が降る。甲辰丸が入港しエビス物産からアバ縄が着す。熊さん入船町へ行き八の倉に入れる。悦三だんだん良くなるが咳がまだ少しとれぬので、吸入と湿布などする。午後二時頃、二階から沖を眺めていると、古英丸がイワシ船一〇隻ほどを引いて出漁するところだ。小樽近海まで出漁するので引船してもらうとのこと。裏に植えた菊苗は元気がよい。夜、支店の湯によばれ九時帰る。星は満天に輝き明日は晴天だろう。イ公園で野外演芸あるとのこと、定めし賑やかならん。

▼六月一七日

起床五時半、イワシ大漁だというので正治、四郎らを連れて見に行く。古英丸が六時頃、一〇隻ほどのイワシ漁の船を引いて入港、一〇玉から一五玉あてとったという。大漁旗を立てている船もある。今は一年で一番日の長いときだ。今日は㋑公園で弁天さん鎮座祭があり、余興として野外演芸会があるとて、九時頃から自動車でたくさんの人が公園へ行く。一〇時頃には沖村、沢江、新地、遠きは美国からからも来る。本年は運動会もなくさびしい。学校も休みなので子供らも皆行く。看護婦さんも埼長に来ていた看護婦さんと一時頃見に行く。曇天で時々霧雨模様の寒い天気だ。子供らは五時頃、看護婦さ



→㋑公園（山口忠治氏の庭園で偕楽園と命名されていた）

んは三時頃帰って来たが、悦三にお土産など買ってきてくれた。親切でよく勤めてくれる看護婦さんだ。正午から農園へ行く。万蔵さんからウラシマの苗を貰ったので植え付けた。夕方、裏の花畑にいろいろな花苗を植えた。夜、五目の馳走がある。働いて食べるのはおいしい。

▼六月一八日

起床五時、入梅のためか今日も朝から霧のような雨模様で寒い日だ。そろそろ旧五月一日の節句が近くなったので、四郎と正治は鯉を揚げてくれとせがむので、熊さんと裏に鯉登りの竿を立てる。小雨になったが揚げてくれと言うので二尾揚げた。ちょうど風が出て元気よく揚がっている。イワシ漁は昨日ほどではないようだ。電灯会社の主任が替わることになって、今日、新しい主任が挨拶に来た。今日は夕食の後から袋張りをやったが、ずうっと悦三の病気などで何かと取り込んでいてはかどらぬ。

▼六月一九日

起床四時半、熊さんが店の掃除をやっているので私も店の整理をする。正治がトーチャン、トーチャンと言うので、早速裏の鯉のぼりを揚げてやったら大喜び、のち浜へ出て見る。八平さんの川崎船が着いていてかなり掛かっている。一五人くらいの人ではずしている。古英丸が六隻を引いて入港して来た。何漁でもあれば町の景気はよい。農園へ行き、花苗五種ほど植え付けた。花盛りになったら見事ならん。オニケシがきれいに咲いている。八時半帰り朝飯もおいしい。相変わらず曇天で小雨が降る。

▼六月二〇日

起床五時、正治は一番に起きて機嫌よろしい。春雨のようにシトシトと雨が降り出しうっとうしい天気だ。雨がこうも続いてはイワシ粕を干すにも困るだろう。農園ではそろそろ虫がついたとのこと。イワシ漁もその後は思わしくない。それに引船の経費もかかるのだ。今朝七時五〇分の自動車で、電灯会社の平さんが小樽へ転任するので出発、私は見送りする。ちょうど家の前から出発するので便利だ。ソ　曽我の四十九日で、五時に仏参に行く。和尚さん、本おっかさんも居られお経をあげる。一〇時半帰る。恵比須神社の当番になっているので早速参詣す。妻は家でときものやら、旭川　平　への荷造りなどしている。四時頃集金に出かける。夜九時頃まで袋張りをやる。その後　本へ行き、長野さんと菊の栽培のことについていろいろ話した。今年は御大典もあるので精々手入れして、よい菊花を作ってみよう。新開町の風呂屋改装中のところ完成、初風呂に行ったが随分立派になった。

▼六月二一日

起床五時半、昨朝からの雨少しも止まず今朝まで降り続く。洗面早々、正治が起きたので浜へ出て見る。今村の浜の下でちょうど引き網をやっているので見に行く。網には五寸から一尺くらいのユゴイが五〇尾ほどとカレ五、六枚が入っている。正治はピンピンはねる魚をみて大喜び、朝早く海岸のよい空気にあたり、引き網や魚を見られるのも田舎のいいところだ。今日は宵節句、熊さんは午前中新地町方面へ掛取りに行く。五〇円ほどある。午後からササの葉やショウブなどを採りに行く。粉たたきをやり、ベコ餅や団子などこしらえる。どこの家でも節句のご馳走作りに忙しい。雨も午後からカラリと晴れ、六日ぶりに青空を見た。イワシの粕干しも愁眉を開いたことだろう。妻は団子、ベコ餅、マンジュウを作っている。夕方、裏に朝顔、松葉ボタンを植えた。夏になったら見事に咲くことだろう。四日の鎌のような形の月がでて星がキラキラ、明日の節句はよい天気だろう。

▼六月二二日

起床六時、今日も曇天だ。熊さんと天野さんは農園行き。曇天だが四郎や正治が喜ぶので鯉のぼりを揚げる。近頃は鯉のぼりを揚げる家も少なくなった。昼は赤飯の馳走がある。私は自転車で熊さんの家まで赤飯を持って行

く。盛り花用の花をとって来る。㊐支店へ行きショウブ湯をよばれる。

▼六月二三日

起床六時、熊さんと天野さんはコヤシ汲みをやる。時々小雨が降る。悦三は熱も平熱、咳もなくなった。午後から納屋場あとへナスを植えに行く。本年は虫害でキウリ、アジウリの新しい葉が喰われて困る。悦三がだんだん良くなってきたので、看護婦さん、四郎、トミの三人が自動車で、新地町の■までリリヤン編みを買いに行き、一〇時頃、また自動車で帰って来た。四郎は自動車に乗ったうれしさと、いろいろな買い物をして大喜び、悦三も看護婦さんからバナナ、チョコレートを買ってもらって大喜びだ。

▼六月二四日

起床五時、長らくの曇天も今日は一天雲なき青空、風も吹き干し物にはよい天気だ。イワシ粕を持っている人もこの天気で、ようやく愁眉を開いたことだろう。洗面後、四郎、正治を連れて浜へ出て見る。イワシ船入港、五、六玉くらいとれたようだ。子供は浜辺で遊んでいると喜んでいる。熊さんは今日から出面五人と袋かけだ。妻も出産だ、悦三の病気だとせわしく行けなかったが、今日昼前畑を見に行く。悦三は日増しに良くなり、今日は四郎や正治と遊んでいる、最早大丈夫だ。看護婦さんも明日あたり帰るだろう。私は三時頃、自転車で入船町中へ行き、大網四〇個ほど保管を頼む。

▼六月二五日

起床六時、洗面後、正治をおんぶして浜へ出て見る。イワシはあまりかからぬ。今年の漁はどうも思わしくない。熊さんは今日も出面五人と袋かけ、玉もかなりいいとのことだ。午後二時頃、看護婦さんとトミが歌棄へツブとりに行く。四郎も行きたいというので自転車に乗せて行く。上ナギで暑さもちょうどよい、四方の景色もよく気も晴々する。ツブ、カニなどをとり四時頃帰る。のち看護婦さんがトミ、四郎を連れ自動車で㋑公園から新地方面へ行き、一時間ほどで帰る。自動車賃二円であったとのことだ。夜、沢江高橋さんの息子さん、二九歳で亡くなり通夜に行く。それからまた、会田さんのじいさんの通夜に行く。蒸し暑くカが出てきた。

▼六月二六日

起床六時、今朝起きて聞けば二階にも下にもカが出たとか。看護婦さんが唇をカに刺されたとか言って大笑い、いよいよ看護婦さんも午後の自動車で帰られることになった。天気快晴、熊さんは袋かけで早くから農園へ行く。一〇時頃、高橋の葬式を送りに行き、一一時帰る。港町の姉も看護婦さんも帰るので、昼食にはほかに白玉を作る。一時五〇分、やぶ長前から自動車で出発した。本当に一生懸命よくしてくれた。悦三も見送った。看護婦さんは窓から手を振ってさようならをして行かれた。一ヶ月間であったが親切にしてくれたので、子供らも皆親しんでいた。暑中の休みには遊びに来ると約束して行かれた。私は三時頃、農園へ行って見る。今日は一〇人ほどで袋かけをやっている。昨日から急に暑くなったようだ。私はケシ、除虫菊、シャクヤクなどを手折り、花畑の草取りなどをして六時帰る。店の前の格子の下に朝顔の苗を八本植える。看護婦さんが帰られたので、妻は二階の悦三のところで休む。

▼六月二七日

起床六時、昨日から急に暑さが加わりカ群も出た。熊さんは袋かけ、出面が一〇人も来ているので早くから農園へいく。早朝、納屋場に植えたナスに水をやる。今日の快晴を幸い、二階の夜具、畳などの日光消毒をした。暑く温度計は七〇度（約二一度）に昇り、四郎や正治らはシャツ一枚で騒いでいる。浜では子供らが海水浴をやっている。いよいよ夏らしくなり、裏のダリヤも元気よく生長している。今日は全国結核予防デーで、生徒が旗行列で町中を歩く。本年初めてタライ湯をやり、子供らと共に入る、気持ちよい。夜に看護婦さんへ手紙を出した。花ショウブへやる油粕の

肥料を用意する。

▼六月二八日

起床七時、今日受け渡しをする大網を大謀まで運ぶべく、古島さんの船を頼んで入船町へ回航する。三五個を渡し、残りの三五個は中の倉に預ける。上天気で暑い、九時に帰る。学校では運動会があるので子供らは握り飯持参で行く。本年は不漁のため、父兄に経費をかけさせないようにと万事質素にした。私も昼食後、四郎、正治を連れて見に行く。風はなし天気はよし、申し分ない天気だ。会場には出店も少なく、例年になくさびしい。食パン、おやきを買ってやる。子供らはそれが楽しみなのだ。午前中、コノさんが男子を出産する。

▼六月二九日

起床六時、今日も天気快晴だ。納屋場のナス畑へ行き水をやる。熊さんは農園で袋かけだ。一〇時頃、自転車で新地方面へ行く、天気が良いので家に居らぬところが多かったが、二〇円余り集金する。帰って午後から袋張りをしたが、九時までで七千枚ほど張った。小樽に帰った野口看護婦さんから礼状が来た。古平は感じのよい所で忘れられない土地とのこと。八月には遊びに来るとあり、悦三は喜んでいる。夜は十二夜の月が出て、星も輝きよい夜だ。

▼六月三〇日

起床六時、今日も天気快晴、熊さんは天野さんと草取りをやる。サクランボと板倉の辺りがドングイなど茂っているのだ。この頃にないほどの蒸し暑さで、まるで夏のようだ。父は一〇日ほど前から気分がすぐれぬと寝ている。四月頃は元気で、佐渡へ行くなどと言っていたのに、今は家の中を歩くのもようやくだ、などと言っている。午後、自転車で農園へ行き、ノボリフジ、ケートンなどの苗植付けをする。ダリヤなどへ水をやったり草取りをし、盛り花によいシャクヤク、ナデシコ、セキチクなどを持って帰る。ヒメユリは明日あたり咲くだろう。部落の例会があり本へ行く。トミが農園へ行きイチゴ、サクランボをもいで来た。例年より早い。

▼七月一日

祝聖会の例会日、三時四〇分に起床した。外は早明るい、洗面早々に出かける。祝聖会の花畑を見回るうちに始まる。セルの単衣でちょうどよい。この頃の気候は実に気持ちのよい時だ。今日は久の五一日目の誕生日なので、前途に幸多かれと赤飯をこしらえる。妻は早くから起きて支度に忙しい。今日も天気快晴。私は自転車に四郎を乗せて十伊之さんのところへ赤飯を配る。帰ってから㊥の山を見に行く。来る一〇日には自転車競争があるので、青年たちは熱心に練習している。夜、学校で山本代議士の議会報告演説会があり聞きに行く。八時から始まり一〇時半終る、大入りだ。月が輝きよい夜だ。

▼七月二日

起床七時、熊さんは出面四、五人と農園へ行く。この三、四日間の暑さで、畑に随分ス虫が出たとのことだ。とにかく袋かけを早くやらねばならぬ。朝の便で看護婦さんから手紙が来た。正午に安田さんの葬式送りに行く。二時頃、正治を自転車に乗せ新地町まで行く。正治をヨに預けて休ませ、用事を終えて帰りに寄る。正のばあさんが来られていろいろ話しをし、四時頃㋑公園へ行かれた。私は袋張りをやる。

▼七月三日

今朝は四時起床したが、早外は明るい。農園へ行き花畑の草取りをして、こやしを七時半頃までやる、よい運動になった。本年は一般に早くサクランボ、イチゴはこの天気で出た。ヒメユリ、ナデシコ、シャクヤクなども花盛り。八時に帰る。今夜も五人で袋かけをやる。ス虫捕りは一段落したようだが、チョッキリ虫がたくさん出た。コノさんのところでは巣上がりで、妻が手伝いに行く。正のおばさん、今日一時五〇分の船で帰られた。妻は吉治、四郎らを連れて農園行き。私は袋はり、正治はおとなしく遊んでいる。妻らは六時頃帰り、サクランボや花をとってくる。夜はタライ湯をし悦三も入れる。

— 続く —

積丹国道開通

住民の悲願「陸の孤島」から開放

★「陸の孤島」返上もいよいよ間近　～続く

一方、積丹半島の冬期間の交通については、古平・余市間の海岸道路の工事の進み具体を見ながら検討されていたが、除雪費の予算が確定したことから、古平町では関係する町内会にも呼びかけ道路の整備に当った。特に沢江・沖村間は道路が狭く積雪量も多いことから、車馬の通行は全く不能であった。沖村町内会ではこの道路整備に先駆けて、一月中旬から三日間にわたって延三百人余りが出て除雪の労力奉仕に当った。その後小樽開発局のブルドーザーによる路線の除雪が行われ、三月末からは中央バスが運行され、ようやく陸の孤島の名前を返上するときがやって来たのである。

★冬期間の道路の確保

寒さと積雪に覆われた約半年の冬の生活は住民にとっての悩みであったが、その中でも困るのは交通機関の途絶であった。余市・美国間の定期船も冬の荒海や悪天候で欠航することが多く、安全な交通の確保は住民の渇望して止まないところであった。

昭和三〇年四月、「積雪寒冷特別措置法」が制定され、除雪・防雪・凍害防止事業が行われることになったが、これには建設大臣の指定を受けなければならなかった。幸い同三二年、「積雪寒冷の度が特に甚だしい地域内で、道路交通の確保が特に必要である道路」として、次のような指定を受けた。

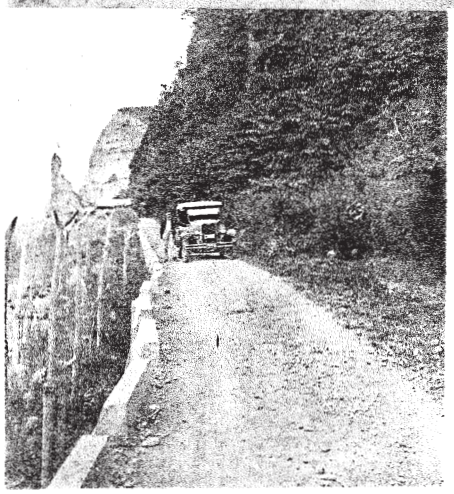
▽入舸・余市線
古平町浜町から積丹町美国まで

▽小樽・江差線
余市町黒川町から古平町浜町まで

★二級国道小樽～江差間の難所

昔から主要な幹線道路であった余市山道・雷電峠・茂津多山道は険しい山腹を複雑に曲折しながら、積丹半島を含めて延々三百キロメートルにも及ぶ、海岸線を縦断するただ一本の重要な幹線道路であったが、道幅が狭い上にカーブや急な坂道が多く、現在の交通情勢からは全く不適当な道路であった。

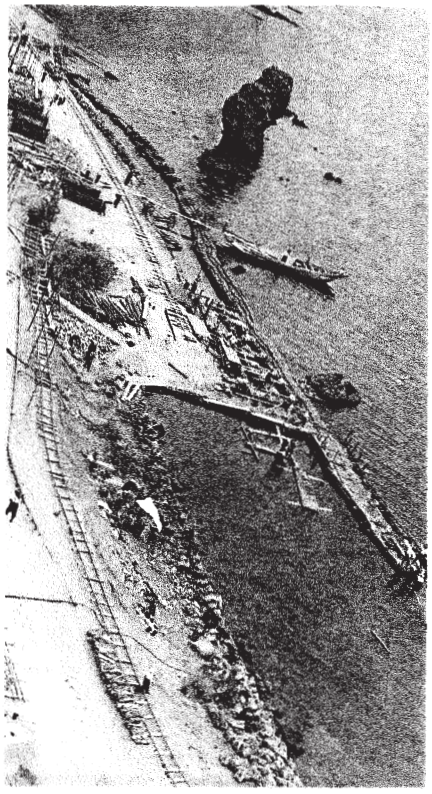
自動車の通行には危険がともない、また冬期間は積雪が多いこと



↑覆いかぶさるような断崖絶壁の下，危険な冬道を通る住人
昭和三年から余市・古平間を定期運行していたフォード車←

から人馬の通行さえ途絶する状態であったので、これらの地域は「陸の孤島」と敬遠され、古平・神恵内間や、島牧・瀬棚間には自動車の不通箇所もあり、この地方の産業や経済活動の大きな支障となっていた。

これまで積丹半島住民にとっての大動脈―余市・美国間定期航路に就航していた金勝丸→



出足平（でたりびら・現在の白岩町）の海岸道路を建設中新しいトンネルが建設中だが、現在はこの道路を通行している→

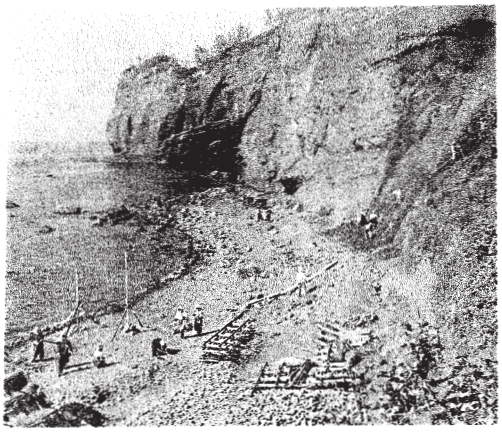
★積丹半島の大動脈

開発局広報「開発」第七十五号には、「積丹の大動脈　古平・余市間道路開通」と、大きな見出しで多くの写真を入れ紹介し、「もしも今年の北海道の開発十大ニュースを募集したら、そのトップほ飾るものは、陸の孤島，といわれていた積丹半島古平町と余市町とを海岸線で結ぶ道路の開通であろう」と、その冒頭で書いている。

北海道新聞（昭和三十三年十月二十日）は、「積丹国道やっと開通」と、「やっとついたか」という住民の思いを代弁し、北海タイムスは、「眠る宝庫の扉開く」と、一次産業、観光の発展による恩恵の大きいことを強調していた。

余市町から古平町・積丹町にかけての五万人の沿線住民は、長年の悲願達成にただただ歓呼に沸くのみであった。

次号《喜びの竣工式》へと続く



～町内の学校探訪～

古平小学校

◇御聖影守護で宿直

校舎の増築に伴い御聖影奉置所も新築したが、夜間の火事などの起こることが心配事であった。そのために学校での宿直という制度がつくられた。この制度は奉置所が無くなった戦後も継続されていたが、昭和四〇年代になって、ようやくこのような日直・宿直という制度が無くなったのである。

◇初めての修学旅行

明治三三年（一九〇〇）七月、高等科の生徒八〇人が、徒歩で余別村来岸まで行き、当日は来岸に宿泊、翌一二日には余別村双源寺に宿泊し、一三日に帰町した。この二泊三日の修学旅行は開校以来初めてのことであった。

このような記録があるが、日本の小学校教育では、学校の行事として『遠足』はあるが、『修学旅行』というものはなかった。

その後、中等学校などの学校制度ができると、宿泊が伴う、ある程度遠距離の見学や研修が行われるようになり、『遠足』と区別された。『修学旅行』という言葉は、明治二一年に始めて使われたという。

学制が発布された時からごく一般的に遠足がある。本州の小学校などでは近くの山への登山とか、神社仏閣への参拝などは行われていたが、修学旅行というのは、世界にも例が無いという日本独自の学校の行事であり、小学校でも社会通念として一般に修学旅行と言われているが、現在の小学校の学校行事には修学旅行は無い。これは「宿泊のともなった遠足」というのかも知れない。

修学旅行は世界にも例が無いと言われるが、隣の韓国にはわずかに見られる。これは、かつて日本が韓国を統治していた頃の習慣が、今に残っているのではないかという。

昭和時代になって、修学旅行は高等小学校（小学校高等科）の生徒は許可されたが、戦時中には戦況の悪化によってすべて禁止された。

この項目の『修学旅行』というのは正しい記録ではないように思われるが、当時の記録によった。

◇一教室増築

その後児童・生徒が増えたことから、明治三四年（一九〇一）一〇月、建築費九四五円余りで一教室（約二五坪）を増築し、翌明治三六年、別表のように学級編成をした。

◇学校行事『四方拝』

明治二四年、文部省から『小学校の祝日・大祭日儀式規定』という省令が出された。これは学校の儀式などの規定としては最も古いもので、その後何度か手直しされたが、大筋では大して変っていない。

明治三三年の『小学校令施行規則』にはこうある。摘出すると、

第二十八条　紀元節・天長節及び一月一日には、職員・児童は学校に参集して、左の式を行うべし

一、職員・児童は「君が代」を合唱す

二、職員・児童は天皇陛下、皇后陛下の御真影に対し奉り最敬礼を行う

三、学校長は教育に関する勅語を奉読する

四、学校長は教育に関する勅語に基き、聖旨の在るところを誨告（かいこく）す

五、職員・児童は、その祝日に相当する唱歌を合唱す

明治時代には祝日は三回であったが、大正時代になるとこれに明治節が加わって四回、四大節と言われるようになった。

これによって、明治三四年一月一日から古平尋常高等小学校では、『四方拝賀式』（元は宮中で行われて

いた行事だったが、後に祝日・大祭日として定められ、学校の行事として行われるようになった）を行うようになり、郡役所・戸長役場（現在の町役場）・警察分署の職員、総代人などが参列した。

▼本校の部

学年	男	女	計
尋常科一年	五〇	三一	八一
同　二年	三四	三二	六六
同　三年	七〇	五〇	一二〇
同　四年	六六	三〇	九六
高等科一年	七一	二三	九四
同　一年	四一	一四	五五
同　二年	一四	八	三二
同　四年	二二	六	二八
計	三七八	一九四	五七二

▼分教場の部

名称	学級	男	女	計
新地	二	七二	三二	一〇五
群来	一	一四	一四	二八
沢江	一	二七	二二	四八
沖	一	四三	二六	六九
計		一五六	九三	二四九
通計	尋常科	三七六	二三六	六一二
	高等科	一五八	五二	二一〇
総計		五二四	二八八	八二二

御聖影（御真影＝天皇・皇后両陛下のお写真）を式場の中央壇上に飾り、武藤勇次郎校長（第五代校長）が教育勅語を奉読した。

※『教育勅語』は明治二十三年十月三十日、明治天皇から文部大臣に下賜され、その写し（謄本）が全国の学校にゆき渡ると、学校での儀式の中で、御聖影の拝礼などと共に取り上げることが定められていた。また「小学校祝日大祭日儀式規定」によって、全国の小学校の儀式の内容に画一的な基準を作った。それほど『教育勅語』は日本の敗戦まで、学校教育の中に深く入りこんでいたということである。

また、御真影や教育勅語が、夜間や休日に学校が無人になったときに、火災などによる災害から守るために学校に宿直や日直が置かれ、この習慣は賛否のある中で昭和四〇年代まで続いていた。

◇子守をしながら授業

次第に建網や刺網が増えるに従って漁獲高も次第に増加するようになると、その処理のために労働力が不足し、児童や生徒の労力も必要とするようになった。

そのような鰊漁期の繁忙期になると欠席者が多く、また漁業経営者の親からも家業の手伝いや、乳幼児などがいるとその子守などをさせたいという要望が多かった。

明治三〇年頃からは、子守のために就学できない児童も多く、毎年四月の入学時期の頃から鰊漁のため休む児童・生徒が多かった。

学校ではこのような実情から繁忙休暇を与えていたが、記録では二週間にもおよぶことがあった。また、依然として就学率が悪かったため、子守をしながら登校することを認めていた。

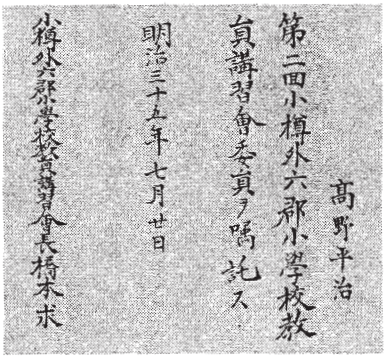
そのような乳幼児を連れて登校したときは、泣いたりすると席を立ったり、授業中でも教室から出たりして面倒を見ていた。就学期に近い幼児の中には、先生の話や授業に興味を示す者もいたという。

乳幼児を連れて登校するという習慣は各分教場でも行われていた。

◇小学校教員講習会

当時は教員養成の学校が少なく、北海道では小学校教員の不足が大きな課題であった。そのため道内の主なところで小学校教員講習会を開き教員の養成に努めたが、受講する者が少なく、受講生の勧誘に当たるための委員を嘱託した。

高野平治
第二回小樽外六郡小学校教員講習会委員ヲ嘱託ス
明治三十五年七月廿日
小樽外六郡小学校教員講習会長
橋本　求


高野平治
第二回小樽外六郡小学校教員講習会委員ヲ嘱託ス
明治三十五年七月廿日
小樽外六郡小学校教員講習会長橋本求

（続く）

春雑感

大澤文子

朝の空の色和らぎを見せ、背に受ける陽さしも心地好い。

北ぐににもようやく躍動感に心をくすぐる様な春の訪れがやって来たのだ。小庭の隅には早くも咲きほこる黄や紫のサフラン幾株。

高空を見上げれば、はや旅ごころの湧きくる思いは誰しも否むことは出来ないであろう。

あわてて今朝は冬靴と夏靴の入れ替え下駄箱を整理する。

ふと垣越しに幼な児達の賑やかな声。そうそう今日は四月七日、入学式の日であろう。真新しい朱色のランドセルが踊る様に垣越しの前を通り過ぎてゆく。

「気をつけてネー！　行っていらっしゃいネー！」

思わず声をかけると、

「はーい、行ってきまァす！」

丁寧な愛らしい言葉を残し、靴袋をふりふりスキップをしながら駆けて行く一年坊主達。

なんて行儀のよい今の幼な子達であろう。親ごさん達の躾のよさが心に沁みる朝だった。

思えば現代の子供達は、満年齢で小学一年生となる時代となったが、昔は数え年八歳で尋常小学校一年生といわれる時代だった。そうそうとおく過ぎ去ったあの頃、新潟生まれの私は数え年八歳の時、新潟師範学校付属小学校の一年生になったのだ。

その頃の小学生達は元禄袖の着物に髪も結び、エプロン姿の一年生が多かったが、おかっぱの子達はいなかった。時代の変遷とは…といっても思うことではあるが…。姉と私はその頃、母の手製のワンピースを着ていたことを記憶している。そうそうあの時…。

母に手をとられ、ピンクのサージのワンピースを着て、付属小学校の入学式に出席したことを今でも記憶にある。それから余り遠くもない師範学校と付属小学校学校だったので、毎朝、父と姉と三人で楽しく学校へ通う日々だったことも記憶している。

現在の私は、余り今後のことをくよくよと考えることはない。だが過去のことはいつもふつふつと楽しく湧きあがってくるから不思議…。

まあ年齢のせいかな？　とひとり苦笑するが…。ふと四月の風にのって蘇ってくるものは…遠いあの日、あの頃こと…。

今更ながら悲しくなつかしく思い出すのだ。

海も浜風も爽やかに吹き過ぎる休日には、必ずといっていい程、

「オーイ！　いたかァ！」

若々しい大声の主、

待っていました！　とばかり負けず大声に答え、

「オー！　あがれ！　あがれ待っていたぞ！」

叫ぶように大声に飛びだすのは私の夫！

やがて楽しそうな笑い声と「パチンパチン」と碁石を打つ音！　茶の間のテーブルは占領されたので、私は海側の一室で楽しそうな笑い声と碁石の音に耳をかしながら、「お茶を…」といつ呼ばれるかと神経をとがらせ、ペンをもっていた。

若々しい大声の主は夫の大事な一番の友「福井幸平氏」そのひとである。お昼はきまっていつも「カレーライス」だった。それに氷水、変りばえのしないいつもの接待食。それでも福井氏はいつも

「うめエナァ、おいしいよオ！」と、楽しそうに言われる。わが夫の一番の友であろう。

時には教育主事の宮本正敏氏も連れだって見えられるが、三人ともなるとそれぞれの談義は楽しい！

私も仲間に入り談じてみたい…なんて思うこともあるがそれは遠慮、三人三様の談義となり、私はそっと耳をかす。

「町のこと」「政治のこと」「体育のこと」等話はつきず。

楽しそうな夫のこぼれるような笑顔は今でも忘れることはない。

福井幸平氏はいつか「故郷を想う」と題されたエッセイを書かれたことはあったが…。

「パチンパチン！」、今でもきっとあの世で夫と二人で碁を打っているのでは…碁の音がきこえそう…。

（合掌…）

「橋の下から拾われた」話

葛西　庸三

私は、旧岩内郡前田村大字上梨野舞納（かみりゃむない＝現共和町）の貧農の八人兄弟の六番目に生まれた。兄が三人、姉が二人、妹が二人いた。

当時の「梨野舞納」は「上」と「下」に分かれ、「下梨野舞納」は岩内町の海岸線に沿って東側に広がる平地で、「旧発足村」に続いていた。「上梨野舞納」は岩内町の街はずれにある通称「ガベ坂」を上り、墓地の中の道路を通り過ぎると低い丘陵地帯が続く一帯にあった。

私の家の高台に立つと、茅沼炭鉱から岩内港まで石炭を運ぶ「架空索道」が見えた。

時には石炭を運ぶ搬器の上に人が乗っている風景もあった。多分、索道の点検作業をしていたのではなかったのか。

また、岩内の海が荒れると轟々というすざまじい波の音が聞こえた。だから私の家は、岩内の街からさ程離れてはいなかったのではないかと思う。

兄が三人いたのだが、何故か親父は私を跡取りにする、と言っていたという。

その親父は、私か九歳の春に病死した。数え五十三歳であった。

長男は農業に見切りをつけ、母の反対を押し切って家を売り、田畑を隣の人に貸して職を求めて鉄の町室蘭へ移った。

ところで私は、小さい時から兄や姉に、「お前は橋の下から拾われてきた子だ」と言われていた。特別、悪意を込めた言い方ではなく、冗談ぽいものを感じていたので、腹が立つ思いはしなかったが、しかし、なぜ私だけがそう言われるのか不思議であった。

小学校に入る頃になって、おぼろげながら解ったことは、私は、親父が数え年四十二歳の、男の大厄の時の子、ということと関係しているということであった。

広辞苑によると ―「厄年」とは、人の一生のうち厄にあうおそれが多いから忌み慎まなければならないとする年。―略―特に男の四十二歳を大厄といい―略― 恐れ慎む風があった。―と解説している。

私は厄年などということにはこだわらないほうなのだが、昔はそれなりの理由があって、慣習として大事に取り扱われてきたのだろう。

つまり、私は、親父が大厄の年に生まれた子だから、災難に遭うことなく、元気に育って欲しいと願う風習から、「橋の下から拾われた子」になったのだと思う。

ちなみに余市町の『登郷土誌』の中にある「赤児の厄事除け」という項の中に、

―― 大正二年頃、子供の無事成長を願って、タライに子供を乗せて上流より流し、すぐその下流で無事流れ着いたこととして救い上げる風習があったと伝わっている。― 略 ―

この話は、多分古くから伝承されている「拾い親」の風習から来たものではないかと思われる。

―略― 父母の厄年に生まれた子などのために頼む親のことであるが、この場合は生まれたての子を仮に辻や家の前に捨てて、あらかじめ頼んでおいた人に拾ってもらって親とする、呪術（じゅうじゅつ）的な拾子の習俗によるものである。登の場合は辻や家の前を、川に流すということになったのではないだろうか。―略― いずれにしてもこの貴重な習俗がどこから入っていつ頃からいつ頃まで続いたものなのかを確かめたいものである。―― 記述されている。

私の生まれた家の周りには、大きな川も橋もなかったので、きっと親父達の「内輪話」の中から「橋の下から拾った」ことになったものだと思う。

今、私は二つの病気を持っているが、日常的には元気で喜寿が過ぎてしまった。これも「橋の下から拾われた子」という呪術の効果なのかもしれない。

さて、歴史と伝統のまち「古平」には、こんな話は残っていないものだろうか。

カタクリの双葉の上に咲く花をなぶりゆく風はや寒からず

花言葉初恋といふカタクリのすがしく揺るるわが狭庭にも

唐松の林に咲けるカタクリは一方向に花をさけゐる

ひとときを花の中に座し見る淡いピンクのいとしき色よ

見晴す一面に咲くカタクリに春日ぬくとし風渡り行く

カタクリの花

瀧内優子

あかときの夢にし身たる遠き日の幻なれど心ときめきて

肩よせて只に歩める若き日よ六十餘年胸に秘めおき

遠き日に君と歩める影ひきて厚苫の岬に陽は沈まむとす

高價なる香水一滴手に受けて君に逢ひたき香りと思ふ

晩年は安泰と出でし卦の言葉信じるとなく祈りをり思ふ

＊＊ 編集雑記 ＊＊

▽今年は予想された暖冬、そして小雪ということで春も早かったようで、それに加えて気温が記録づくめで高かったこともあり、一気に春が訪れて来ました。

本州の太平洋岸や道東の方では、とんでもない春一番の強風で被害も出たようですが、こちらの方では穏やかな春本番を迎えました。

▽例年、この季節になるといつも話題になるニシンですが、新聞では、今年は小樽方面で一二〇トンとか。昔の漁で言えば一六〇石、これだと大凶漁！で大騒ぎになるところですが、ご時勢で、新聞でもマアマアの漁だったと報道しています。

近年各地で盛んになった人工孵化による稚魚の放流事業が実ってきたということでしょうか。明治から大正のニシン豊漁時代、岸に打ち寄せられた数の子をそのままにしておかないで、海に戻したらどうか、と提言した人もいました。

懐かしさと珍しさで試食してみましたが、サハリン系と石狩湾系の違いか、先ずはあぶらのの

ってない大きなイワシ？といった食感でした。「ニシンを食べた、ということでちょっと満足した」、ということでしょうか。

▽「せたかむい」もやっと季節外れの2月号を出しましたが、定期的に発行出来ずに申し訳ございません。仕事場が分かれ、特に冬の間は動きが鈍くなり、どうもスムーズにいきませんでしたが、これから少しでも遅れを取り戻したいと考えております。

次号は増ページ（二〇ページ）して、3・4月の合併号とし、中旬には発行したいと考えております。ご愛読ください。

▽先頃、郵便局でお会いしたおばあちゃん？から、「海岸道路のことが載っていて懐かしかったこと。私も若かったからモッコで土運びをしたこともあった。たまに石が落ちてくるが、途中の岩に当って頭の上をかすめて飛んでいくが、怖かったこと。ちょっとだったが、体験者の話が聞けました。

五〇歳ぐらいより若い人だと、生まれた時から海岸道路はあったので特別の思いもないでしょうが、今はその道路の多くは、通行の安全性確保からトンネルに変ってしまいました。

悠

雑詠〔三月号〕

主宰　水見壽男

岬の風初雁として迎へたる　越野清治

名月の影のさしくる潮に浮く

淀みなき潮を染めたる崖紅葉

朝夕の冷え込み厳し渓紅葉　山口悦子

一山を一夜に変へし薄紅葉

新米に手心の要る水加減

花芒暮色の風に身をゆだね

仙人の昔語りや濁酒　越野敏雄

読経の母の背丸しそぞろ寒

天高し一片の雲渺々と

湖の清しき水面紅葉山　高橋重子

山裾の一樹鈴なり柿の秋

山麓の蒼天に映え柿の秋

潮の音風の音澄む十三夜

初紅葉やま懐に嵩なせる

日もすがら紅葉舞ひ散るしづ心

行秋や影と二人の厨かな

栗拾ひ手と手とつなぎ童歌　外山俊久

盆栽がやっと色づき秋風情

秋暁や身震ひひとつ大気澄む

大気澄み錦に染まる秋の峰　堀典子

波の打つ山ことごとく紅葉なす

崖紅葉海の面千々に砕きをり

秋雨の音に濡れゐる心かな

秋潮のひびきし力尽きるなく　本間寿昭

狼煙跡千古の岬に初紅葉

岬山の狼煙の跡や暮の秋

狼煙台残る岬山薄紅葉

稲の秋鉱石運ぶ道の跡

対岸の一景に見る秋の声　渡辺嘉之

秋風が開け放したる番屋の戸

オカリナの音色は秋の風の色

行き暮れて秋の雲にもある孤影

鳥渡る海に道筋あるやうに　室谷弘子

秋の風しきりに岬打ち鳴らす

風の岬紅葉岬となりにけり

初紅葉出でしばかりの色競ふ

産声を発する岬の初紅葉

怒濤

【三一】
―一二月号―

一羽だけ陣を遠見の鴨のゐて　越野清治
見張り鴨のみに従ふ鴨の陣
聖樹灯子等の聖歌で点灯す　斉藤波留
年の暮心急かるる夕支度
熊除けの鈴の音絶えて峡の闇　山口悦子
象潟の無花果生りし家並かな
浮寝鳥川面のけぶり夢の中　越野敏雄
浮寝鳥けぶる水面や夢続く
寒さ来て安否気遣ふ子の便り　大和田絵伊
木枯の意のまゝなりし人の世も

冬霞岬端ほのか波きらり　高橋重子
古暦厨に立ちて独り言
病める足落葉を踏んで癒される　外山俊久
何時も遇ふ新聞少年落葉坂
寒き夜や心の中に北海道　堀典子
昼と夜の数ふやしつつ年を取る
女衆北風を真面の浜仕事　本間寿昭
石狩の海黒々と鰤起し
沖雲の暗さに潜む冬の星　渡辺嘉之
着ぶくれて浜風どんと受けにけり
つかの間の冬日の弾む船溜り　室谷弘子
岬の波冬日に溶けてをりにけり
葉を落し枝透けて見ゆ十二月　仲谷比呂古

古平俳句会

短歌

古平町岬短歌会

話題作の母べえ描く親子愛むごき時代を今に伝へき　金子寿子

夕暮れに街のキャンドルほのぼのと揺れる灯りは雪路そめて　坂本信子

温みこし日差しを背に桜木の根方の辺りの雪掘りほぐす　鈴木時子

手を合はす数珠の冷たき如月の亡き舅を思ひし日なりけり　田中香苗

朝明けの小波ひかる海遥か気あらし立ちて足止どめ見る　玉谷美都子

年毎にひとり居の友多くなり健やかなるをただに願ひぬ　丹後初江

み仏に感謝し励む寒修行鈴の音色に心和みて　寺田カツ子

どんよりと鉛色せし空の下雲に覆はれ山も眠りぬ　仲谷喜美能

此の年も健やかなれと戸を開けて月影に打つ鬼やらふ豆　東美知

スタンドの灯火に寄りくる虫もなく寒き夜ひとり読む歌集なり　堀典子

俳句

古平俳句会

深呼吸して筆持つもも文化の日　越野清治

浮寝鳥小樽運河の日溜に　斉藤波留

馴れぬ手の子が浅漬や母の味　山口悦子

鮟鱇の憎むに非ずぶつぎ鍋　越野敏雄

冬雲の湧き出る様も日本海　大和田絵伊

ちりばめし冬の星座や無双窓　高橋重子

赤蜻蛉飛んで夕日にとける村　外山俊久

山襞を深くたたみて冬の雲　堀典子

霜の降る音を聞けるか夜半の空　本間寿昭

傾きし日差し支へて冬木立　渡辺嘉之

荒れやすき神威岬の冬ざるる　室谷弘子

一夜にて樹氷の世界拡ごれり　仲谷比呂古

古平町史年表

昭和35年（1960）～続き

8／26：明和小学校創立50周年記念式と,引き続き祝賀会が行われる

9／7：古平町出身で,衆議院議員に立候補することになった寿原正一後援会の発会式が古平小学校で開かれ,600人を超える支持者が集まり,松野鶴平が応援演説を行う

9／11：町営でクリの植栽を始め、将来古平町の名産品としての育成を目指し,町民にも苗木を格安で販売し積極的に栽培をすすめる

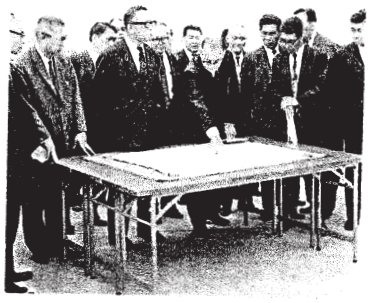
同　：古平・余市・美国3町村の青年団による,余市～美国間のマラソン大会が行われる

9／15：古平中学校体育館を会場に,町が主催して古平町敬老会が行われる

9／16：潅漑溝の修理を2か年計画で行うことになり,総工費22万円を反当750円宛徴収する

9／21：古平小学校新築工事入札が行われ、島藤建設㈱が落札する

9／27：町村金五知事一行10数人が沖村川復旧工事現場と、古平漁港を視察のため来町する。町長の陳情を受けた後,午後積丹町へ向かう



9／28：古平町消防組の創設に功労のあった佐藤伝作の供養が、古平消防団により行われる

10／6：古平小学校校舎の起工式が行われる

10／28：古平信用金庫理事長梅野富蔵が、東京へ出張中死去する

10／30：寿原正一が衆議院議員に立候補し,古里である古平町で第一声を挙げ町内を廻る

10／31：北海道開発局長小川譲二が古平漁港を視察する

10／一：都市計画街路事業として行われた入船町浜通りの舗装工事が完成する